

きっとそれは運命的な何か

ppが足りない

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

冴えない男子高校生の佐渡 遥。小中と女みたいな名前だと弄られていたが、高校に入ってからそんなことも無く平穩に過ごしていた。しかし剣道部顧問兼クラス担任の大文字 照彦の命によりクラス一の美少女、姫乃木 有紗にプリントを届けることに。どうやら彼女は演劇部にいるようで、彼がドアをノックして入った部屋は演劇部の衣装室だった。そこで彼が見た一つの服により、彼の平凡な人生は終わりを告げることになる。

これは一男子高校生の特に何も無い日常だけど、本人にとってはドツキドキな女装物語。

目次

目覚めの時

1

女声

8

古着屋

13

## 目覚めの時

俺は両親から貰った名前が嫌いだった。

佐渡 遥、まるで女に付けるようなネーミングセンスを疑問に思ったのは小学生になった時だった。

入学早々すぐに出来た男友達から、お前の名前は女みたいだなと言われたのがキツカケだっただろうか？

確かクラスの女子にも遥という名前の奴がいて、そのせいで随分と揶揄われたし、その女子からも嫌われてしまったのは今となっても悪い思い出だ。

そしてその日直ぐに親に聞いたところ、どうやら産まれてくるのは女の子だと思っていたらしく、検査でもそういう判定が出ていた為に男だった時の名前を考えていなかったらしい。

なので産まれてきたのが男だったのに気付いた時は大層びっくりしたそうで、急遽名前を考えようとしたが、もうこの名前ではええんやない？ という昔も今も家で一番の権力を持つ母の一言で人生の敗北が決定した。

「おーい遥。これからどつか寄っていかね？」

「悪い、今日は家の買い出し当番なんだ。また今度な」

「ちえっ、まあ、なら仕方ないな。じゃあな遥」

「ああ、また」

けれどこうして高校生になった今は名前で弄られることもなく、平穩無事に過ごせているので末代まで呪ってやると考えることはなかった。……てか末代までって俺も入ってんじゃん、何考えてんだほんど。

「佐渡、これを職員室まで届けるの手伝ってくれないか？」

「あ、いつすよ」

一人漫才ほど悲しいものはないなと黄昏ていた時、上から聞き覚えのある声が掛かる。

というか聞き覚えどころじゃなく、ほぼ毎日聞いている男の声で、

顔を上げた先にいたのは太い眉毛と角張った髪型に竹刀を持った剣道部顧問の大文字 照彦だった。

右手に授業で使った参考書を持っていて、左手で握った竹刀を教卓に向けている。

何だ何だと目を向ければ、その上には同じ参考書が重ねられている。

二つ返事で答えたが、あの参考書は何度使ってみても、思わず「重いなあ」と口ずさんでしまうくらいには重い。それがクラスの半分、十七冊分ある訳だから相当だろう。

それを片手で軽々と持っている剣道部顧問兼クラスの担任の膂力に感嘆してしまうが、今はこの非力な体で職員室まで運べるかの是非が問われている。

「しかしお前は相変わらず細いなあ。本当に持てるのか？」  
「持ちます」

しかし挑発されて黙っていられるのは男じゃない、指を鳴らしながら口でゴキゴキ言うと、教卓の前に立って指を下に差し込み持ち上げた。

「ふんぬっ！」

「おう、本当に持てるんだな。一冊五〇〇グラムあるのに」

「そ、そっすか！ 余裕っすね！」  
嘘ついた。

膝は現在進行形でカクカクダンスを踊っていて、上体を前に反らししている。

流石に重さを量ったことは無かったけれど、道理で重い筈だ。十七冊合わせて合計八・五キロ、更に面積も大きい訳だから持ちにくく気を抜くと落としそうになる。

「さあ行くか、佐渡」

「はい、先生」

だから先生、ちゃんと運ぶからその早歩きをどうにかして貰えないでしょうか？

「よし、ぐ苦勞さん。いやあ本当に助かったよ、ありがとな佐渡」

「いえ……それでは」

札を言われるのは悪くないどころか心地よい。

その為なら面倒臭いことを進んで引き受けはしないが、多数決で決まったのなら心臓をバクバクさせて鬱になりながら努力する位には好きだ。

けれど先生、どうせならこれからはその片手の竹刀を下ろして欲しい。

何でいつも持っているのか？ もしかして無機物愛者なのか？

なんて聞いたら楽なのだろうが、クラスというか学校全体の噂で聞いではならない十の不思議に入っているそうなので、ビビリの俺は聞くことが出来ない。

よくクラスの女子が、聞いてみたんだけどさあ、と言っているのは嘘に決まっている。

本当に聞いていいのなら俺の苦勞は一体何だったのかと、人生稀に見ない自己嫌悪に陥ってしまうから。

「あ、そうだ。このプリントを委員長に渡しておいてくれないか？

渡し忘れててな、アイツなら今頃演劇部で活動してると思うから、よろしくな」

「……あい、分かりますた」

思わず『し』を『す』と言ってしまう位には、頭を絶望が支配し始めた。

俺はファンタジー物の主人公かと突っ込みたくなるのを我慢して、プリントを預かって職員室を出る。

思い出されるのは茶髪の長い髪をポニーテールにした女子生徒の姿。

沢山の女友達と常に会話していて、男友達も多いと聞くし、その面倒みの良さ与人付き合いの良さからオカンと密かに呼ばれているような気がする。

そんな彼女の名前は姫乃木 有紗、何だか凄そうな名前の彼女は所謂ギャルで、いつも目の下に星のシールか何かを貼っていて、胸元を

大きく開いてスカートはギリギリまで詰めているミニスカ。

ウチの学校はエゴサーチしたところ制服が可愛いとの情報があり、なるほど確かに、と思うくらいには彼女は美少女っぷりを発揮していた。

その元来持った巨乳の谷間が制服の隙間から見えているので、いつも視線を向けられないが、視界の端に映る度に可愛いなあと思うくらいには可愛い。

きつと真正面から見れば鼻血が出ちゃうくらいには可愛いに違いない。

「……着いちゃったよ」

委員長の可愛さについて自問自答していると、目の前に演劇部衣装室と書かれた表札が掲げられたスライドドアが出てきた。

中からは話し声が聞こえるので、誰かしらが居るのは間違いない。出来れば人が沢山いる演劇室には入りたくないのですが、ここに例のあの人がいることを願いながら、軽くノックしてドアを開ける。

そして見えてきた部屋の中には一人だけ、それも例のあの人である姫乃木 有紗がそこにはいた。

「あ、ごめんね？ 用事が出来たからここで切るよ。うん、分かった。じゃあまた後で、うん、バイバイ……ふう、で、どうしたの遙？」

相変わらず人の表情を読むのが上手い人だ。

なるべく顔には出さないようにしたが、気まずそうにしているのを察して電話を切ってくれたのだろう。

そして入学してから三ヶ月と少し、普段会話はしなく事務的なやり取り、提出物の確認くらいしか話すことがなくその会話数は片手の指で数えられる位なのに名前を覚えているし、尚且つ呼び捨てだ。

「コミユカの鬼にも程があるだろう。」

「いや、えつと……その……これ」

「ん？ ああ、もしかして衣装借り受けの書類？ 大文字先生に頼んでおいた奴かな？ わざわざ持ってきてくれたの？ ありがと遙」

これだ、緊張でガチガチに震えてキョドリながら『いや』と『えつと』と『その』と『これ』の四種類しか喋れない俺とは違う。

眩しい笑顔で話す彼女は、四種類どころかプリントの内容に加えて渡してきた人物の特定、更に労いを重ねてからの名前呼びお礼というクワトロコンボを決めてくる。

こんなの彼女を好きにならない方がおかしいとは思わないか？

「うん、判子も貰ったし許可も得た。これで衣装の準備は大丈夫かな？ あつ、そうだ遥。ちよつと来て」

「へあう!」

いきなり手を引かれた俺は、クソみたいな声を出しながら、トイレ行つたあと三回くらい手を洗つたつけ？ とか、手汗酷くない？ とか、手が柔らかいなあ……とか色々な思考が巡る中で、中心にドデンと居座っているのが好きな人に手を握られちゃった、という本来なら女の子が思うべき感想だった。

このまま時間が止まればいいのにと幸せを感じていると、直ぐに手が離れて行ってしまう。

思わず手を舐めそうになるのを、太腿を思いつきり抓ることによつて回避する……痛い。

「これどう思う？ 私が家で作つてみたロングのワンピースなんだ。白い生地が清楚アピしてて、かなりエモく仕上がつたと思うんだけど」  
「えつと……いい、と思う」

「ほんと?! これでクラスの全員から高評価貰えちゃつた！ やつたね！」

両手を胸の前で小さくガッツポーズして、少し飛び跳ねている彼女は可愛すぎると思う。

何を言っているのかはちよつとよく分からなかつたけど、単語だけではなく『と』を言えたことに感激しながらその服を見る。

通称ワンピースと呼ばれる上の服と下の服が一体になった、アニオタ目線でいえば儂い清楚キャラがよく裾を靡かせてパツケージにイラストされている時に着ている服と言えば分かりやすいだろう。

まるで店の服みたいに綺麗に作られたそれは、最初はただ布を切つただけでは？ と、恐れ多いことを考えたけれど、よく見てみると白いだけではなく様々な模様が薄く縫われているのが分かる。



それは地面に生えているよく分からない小さな草を数えるかの如し精密さはミシンで縫っているのが信じられないくらいに細かい。

もしかして手縫い？

「これって……どうやって」

「ふふっ、私が手で縫ってみたんだ。勿論生地は市販のだけど、一枚の大きな布から全部仕上げてみたんだよ。三日くらい掛かったけど、かなりの自信作なんだ」

なんと、この力作は手縫いらしく付け加えて三日で完成したのとこのだ。

信じられん、天才かよ、と言いそうになるのを口を閉じることによって防ぎ、ただモゴモゴ言っている変な人になるだけで済んだ。

それにしてもこれを手縫いで三日は凄すぎる。

あの、なんていうか……なんだ……マルカジリ？ で売ったらかなりの値段でいけるんじゃないか？

システムはよく分かんけど。

「あ、そうだ。私早く戻らないと行けないんだ！ 皆が待ってる！ それじゃあ遙、しっかりと受け取ったからね！」

変なことを考えてる間に、彼女は慌てて去って行ってしまふ。こんなことならもつと話しておけば良かったと後悔しながら、彼女が出て行ってから少し経った後に出ようと考えていると、振り返った彼女が言った。

「それ触ってみてもいいからね？ ほら、あそこに姿鏡あるし重ね合わせてみたりしちゃって！」

いたずらっ子のような可愛い笑顔を浮かべた彼女は、ドアを開けて去って行く。

俺は暫し呆然とその去って行った時の姿を残像として思い浮かべながら固まっていた。

しかし数秒後に正常な思考が戻ってきたので、出来るだけ皺にならないようにハンガーに掛けられたワンピースを手を持って姿鏡の前に行く。

言われてしまったからには、しておかないと男の恥というものだ。

俺は一割の使命感と九割の好奇心を持って体の前に持ってきた自分自身の姿を見る。

袖がないワンピースからYシャツが見えているのが何とも不格好だが……何だろうか？ このむず痒いというか、浮き足立つとかか。

「……楽しい？」

俺はまるで自分が女の子になったみたいで、高鳴る心の臓を優しくワンピースの上から押さえ付けながら、今までに感じたことの無い歓喜を堪能していた。

## 女声

「俺……どうしちゃったんだろう」

学校からの帰り道、演劇部の衣装室を出てから吐いた、何度目かも分からない溜息をじめじめとした空気に溶け込ませる。

何だかいつもよりも周囲の風景が色褪せているように感じるし、ぽっかりと胸に穴が空いてしまった感覚があった。

一体俺はどうしてしまったのだろうか、原因は分かっているが今ま  
でなったこともない症状だったので、如何せん治療の目処が立たな  
い。

きつと時間が解決してくれるのを待つしかないのだろうかと思っ  
ていると、目の前に夏だからか異常に丈を短くしたスカートを履いて  
いる、ウチの高校の制服を着た女子生徒が二人並んで歩いていて。  
あともう少してパンツが見えるのではないかというスカートから  
は、ニーソックスとの間に絶対領域が生まれていた。

歩く度に柔らかかそうな太腿を擦り合わせているのを見ると、脳内に  
彼女の姿が思い浮かんで、目の前にいる生徒と重なり合い歩いている  
のを想像すれば、罪悪感と興奮で顔が赤くなってくる。

「もしこの気持ち知られれば……いい笑いものだろうか」

誰にも聞こえない位の音量で呟いた声は、直ぐに周囲の喧騒に掻き  
消される。

誰にも聞こえないように小さく口に出したのだから、それ自体は良  
かったことなのだが、思わず視線を戻したそこには踏切で立ち止まっ  
ている女子生徒の姿。

今度は彼女と重ね合わせることなく、その制服に目を向ける。……  
何だか、少し……ほんのちよつとだけれど、あの制服を着てみたいっ  
て思った。

「ああ、何考えてんだ」

俺は気持ち悪い考えを振り払って電車が遠ざかる音と、カンカン鳴っていた五月蠅い音が消えたことを認識して、歩き出す。

今度は視界に入れないように女子生徒達の前に足早で移動して、追いつかれない程度の速度に戻す。

これ以上見ていたら本当に着てみたくなってしまうから。

「ただいま〜」

「あつ、おかえり遙。今日も疲れ切った顔してるね」

「うつせ、姉貴には分かんねえよ」

今は大学二……いや、三年生だったか？ 弓道部の主将を務めていて、県の雑誌にも載ったことがある。

アーチェリーでオリンピックに出るともつぱらの噂で、弟の俺にも聞かされていないが、本当に出るのなら凄いことだ。

その際には是非、家族には弟が居ないと伝えるか家の住所を公表せず、顔を映さないで貰えると助かる。

「今日の夕食はハンバーグよ、遙」

「母さん、ハンバーグかあ……なら今日の炊飯器は久し振りに泡吹いたのか」

ハンバーグや肉料理が献立に出る時は、いつも四合以上のお米を炊いている。

そして四合以上になると、家の古臭い炊飯器は泡を噴き出し始めるのだ。

だからリビングに入って炊飯器が泡を噴き出していたら、十中八九その日の献立は肉料理と分かる。

偶に寿司の時もあるから一概にそうとは言えないけれど。

「じゃあ部屋戻って荷物置いたら降りてくる。そうだ、父さんは帰ってきてるの?」

「うん、今はそこでテレビ見ながらだらけてるわ。後でケツを蹴ってあげて」

「うーい」

背中越しに軽く手を振りながら俺は階段を上がる。

観葉植物が飾られた踊り場を抜けて着いた二階の奥の部屋、扉に子供の時に描いた犬の絵とはるかという丸文字が載った木の板が掛けられている。

何処かの宮殿の天井のような形をしている、丸い取手を回して内開きの扉を開ければ、白色を基調とした味気ない部屋が出てきた。

まるでモデルハウスの部屋の内装をそのまま持ってきたかのような部屋は、人が生活しているのにも関わらず、何だか生活感がないように感じる。

部屋の主にも関わらずそう感じるということは、他人から見れば本当に人が生活しているようには思われまいのだろう。

「さっさと行くか」

シオルダーバッグをベッドの上に投げ捨てて、首を絞めていたネクタイを解き机の上に置く。

こうしただけで生活感がぐっと出るのだから不思議だ、まるで普段の生活はバッグとネクタイにも劣っていると言われてそうで、少し悔しくなりきちんとネクタイは畳んで、バッグは机の横のハンガーに掛け直しておく。

「よし、これで生活感がない」

元のモデルハウスに戻ったことに領いて、俺は部屋を出ると下に向かう。

米はもうそろそろ出来上がる頃だから、きつと直ぐに夕食が始まるだろう。

母さんは食事の時間に遅れると口煩くなるから、早めに行っておいて損は無いし、まだ掛かりそうなら父さんが見ているテレビでも見ればいい。

少し駆け足で降りている間に、女装のことはすっかりと彼方に消えていた。

「あく生き返る」

夕食を食べ終わった後、俺は家の小さくも広くもない風呂に全身を浸かせていた。

首まで沈めながら、タイル張りの天井を見上げてみる。

そこには湯気が水滴となつて張り付いてるのが見えて、時たま大きな雫となり水面に波紋を拡げていた。

それが顔とかに当たった時は冷たさで身震いしてしまうが、そんなものは風呂の温かさで直ぐに消えてなくなってしまう。

「……俺って細いよな、やっぱり」

まるで女みたいな体型……とは言わない迄も、全身が細いという印象を受ける。

腕とかは筋肉が本当にあるのか疑わしくなる位ほっそりしていて、ぷにぷにしている。それは胴体にも伝播してスラツと通った胸の下はお腹にくびれができていて、そこから伸びる脚は長く、無駄なことに臀部にふつくらと肉が付いていた。

肩幅が狭いということがないのが、唯一の救いだろうか？ しかし一般的な男にしては狭いというくらいには、狭い。

「……こんな感じかな？」

伸ばしていた脚を折り曲げて、少し膝を重ねるようにしてから足先を広げる。

太腿に腕を付けて前屈みになりながら、顔をほんの僅かに傾けてウインクしてみた。

「……ばっく!!」

変な体勢のまま立ち上がって、浴槽に脛をぶつけながら出る。シャワーを勢いよく出して浴びながら、俺は跪いた。

「……脛……痛い」

これからは浴槽で変なことは考えないようにしよう……俺はそう心に固く誓った。

「ああ、疲れた」

何というか……今日は激動の一日だった。

激動といっても精神的にだけけれど、あの服を見てからどうにもおかしくなって来ている。

今まではそんなことなかったというのに、風呂を浴びてきっぱりし

た瞬間に、忘れていたあの時の記憶が蘇って、こうしてベッドに寝ている今も悶々とそのことを考え続けている。

「あー……あー……ダメだ」

男にしては高い方の声だが、やはりそれは男の声で、女子とは質が違う。

もしかしたらと思って試してみたものの、それは無理な相談なのだろう。例え体が似通っていても、声はどうにも出来ないのだ。

「……女声……出し方」

別に変な考えを持った訳じゃない。

ただ何となく、このままでいるのも気に触ってしまうので、もし方法があるのなら知りたくなっただけだ。

だからベッド横の小さな棚の上に置いたスマホを取って、ネットで検索しているのは至って正常な思考の結果であって、別に俺が変態という訳ではない。

「なるほど、こうするのか……誰も居ないな……よし」

その日から何となく、一日一時間程のトレーニングを始めることにした。

別に深い意味がある訳じゃないし、女声が出せるようになったら宴会の席とかでも披露できるネタが出来て、無駄にはならない。

「頑張ろう、うん」

そして一生懸命にやらないのは間違っている気がするので、俺は真剣にやることにした。

それ位勉強をしろと言う人もいるかもしれないが……それとこれとは別の話だろう。

## 古着屋

「どうしよう……」

「んあ？ 遥どうしようってどうしたんだ？ 何かあのか面白いこと？」

「何で面白い限定なんだよ……なんもないわ」

俺がポツリと漏らしてしまった一言に、隣の席に座ってた男が探りを入れてきた。

いや、探りではなく純粹に興味本位なだけなのだろうが、人に言えないことで悩んでいる俺としては心底鬱陶しい。

これがゲームで苦戦しているとかなら、迷いなく巻き添えにいていくというのに。

「ほーん、まあ何でもいいけど。けどな遥、姫乃木の方を見つめながら言ったら誤解されるかもしれんから、注意しとけよ？」

「ふあっ!? 見てねーしー」

不味い、自分でも知らぬ間に彼女の方を見ていたらしい。これは非常に不味い事態で、ただでさえ学年の殆どと言っていい男子から熱意を浴びている彼女に、熱い視線を向けていたなんてことがバレればお終いだ。

迅速に処理しなければならぬことに……

「まあお前なら誤解されても大丈夫だろうけどな、絶対にノーマークだと思われてるだろう」

「……そこまで言うことないだろ」

分かっている、俺が男として見られていないのは分かっているが、こう……人に言われるとなるとクルものがある。

誰から見てもまるで魅力のない俺……けど、もしかしたら女装すれば変われるのだろうか？

新しい人間……私として生まれ変われる？



「とは言っても、俺が持つてる訳ないしなあ」

「そりやそうだろ、陰キヤで口下手の俺達がお近付きになれるのが間違ってる」

一瞬ぶん殴ってやろうかと思ったけど、俺達と言ってたので許してやる。

これでお前だけみたいなの発言をしてたらどうなっていたことか……帰り道のゲーセンでガンシュー100連発の刑に処していたぞ……ああ、考えただけで恐ろしい。

「……勘違いしてるならそのままにしておいた方がいいな」

誰にも聞こえないように独り言ちる。

コイツは魅力を持ってないという面で言っているのだと思いついでいるが、実際は女物の服を持っていない、という意味だ。

男である俺が持つている訳ないし、買うにしても変態だと思われるから嫌だ。

誰かしらの協力者がいれば良いのだろうが、生憎俺よりも先に女装にハマっている奴など聞いたことがない。

「……悶々するなあ」

あの日から一週間、相変わらず女装について考え込んでいた俺は、日に日に溜まる感情を押さえ付けるので精一杯だった。

「だからここに来たのは間違いではない」

目の前にあるのは古着屋、ここなら男が女物を買っても変だと思われない筈。

そして出来るだけ男っぽい服を買えば、更に何とも思われないうう。

「よし、行くか」

九割九分九厘の緊張と、一厘の興奮と共に俺は古着屋に入った。

「えっと……ごちゃごちゃしてて見にくいな。あつ、レディースって書いてるし、ここでもいいのかな？」

今日は先週の水曜日の事件から十日後、家の最寄り駅から数駅分離

れた場所にある、以前ここに来た時に偶然目にした古着屋に来ている。

中はがらんどどうで店員の姿は見掛けるが少なく、客は一人も居なかった。

今の時間が開店直後ということもあるだろうが、客の少なそうな時間を狙って来たのでこの状況は好都合だ。

さっさと服を選んで買ってしまおう。

「……服ってどうやって選べばいいんだ」

何というか……古着屋なのに色々な服が売られている。可愛い感じから大人な感じまで多種多様で、しかもコーデイナー？なんてものは生きる上で必要なかったので知る由もない。

店員の目も気になるから逐一注意を払わないといけないし、どういうものにしたらいいのだろうか。

「よし、こういう時は」

ポケットからスマホを取り出してネットを開く。検索するのは勿論、地味、女物、服の三拍子の入力。

恐らくこれで何かしらヒットするだろうから、それを参考にして選べばいい。

おっ、出てきたな……よしよし、えっと……ほうほう、なるほどな。それじゃあこれとこれにするか……おっ？ デカいのが良いのね……なるほどなあ。

「これだ。お値段も……二着で四千二百円か……ちよつと高い気はするけど、初めてならこんなものかな」

手に持つのは黒のビッグサイズのパーカー、何でも大きなパーカーを身に纏うことで体格を隠すことが出来るし、可愛らしさを演出できるらしい。理由はよく分からない。

そしてもう一着はとつても丈の短いジーンズのような感じ。女の人ならいいのだろうけど、俺が履いちやうと一部分が目立っちゃうのが怖い。

けれど調べてみると、何でも男の象徴を目立たなくさせる方法があるらしいので、出来るだけゆったり目にしたショートパンツを買っ

た。

この二つを合わせることで、とつても短いスカートを履いてるように見させて、男の視線を釣るのだとか。

何にしても外で着ることはないだろうから、俺にはなんの意味もないが。

「よし、行こう」

俺は多めに持ってきた金額、合計一万円を使い切るように適当に安い男物の服を取っていく。

こうして女物だけでなく男物を買うことによつて、お使用的な雰囲気を出すのだ。

古着屋で買ってくるお使用なんていうものが、あるのかどうかは知らないけれど。

「お願いします」

「いらつしやいませえ、こちらお預かりしますねえ」

レジに立っていたのはまさかの女の人で、黙々と品物をスキャナーに通していく。

それを視界の隅で観察しながら、もうそろそろ積み重ねられた男物の服が終わって女物が出てくる。

もし気持ち悪い奴を見る目で見られたらどうしよう……その時は心を殺して無になるしかない。

「ん？……え、合計十点で九千八百七十円になります」

「あ、はい。じゃあ一万円からで」

「一万円お預かりします。ではこちらお釣りの百三十円ですね、ありがとうございます。またお越しくくださいませ」

一瞬反応された時はビックリしたが、直ぐに何事も無いようにレジを通していき、後は普通に買い物をして終わった。

カゴの中に入った服を見てみると、何だかやり切った感と遂に女物の服を買ってやったぜ、という感情で思わず飛び跳ねそうになる。

しかしここでニヤニヤするとレジの人にバレてしまうので、俺は無表情を貫いて服を袋に仕舞っていく。

「……………」

しかし途中でおかしなことに気付く。

何故か三つある袋の内、一枚が真っ黒で中身が見えないようになっていたのだ。

こういうのは女性用品とかに使う物で、今回の場合にそれらしき物は何も……

「あつ……」

もしかしてと思い視線をレジに向けると、丁度そこに立っている店員と目が合った。

高校生か大学生くらい女性の店員は、黒い袋を指差しながらニコツと笑ってくる。

俺はその顔を見ているのが耐えきれなくて、さっさと女物の服を黒い袋に入れると、大きく一礼してから古着屋を足早に出る。

俺が着るとはバレていないだろうが、何とも粋な計らいをしてくれたものだ。

また来るかもしれないから、その時には別の店員がレジにいる間に買い物を済ませよう。

「……早く家に着かないかな」

大事に袋を抱え込みながら、俺は部屋の内装を頭に浮かべていく。鏡は無かったから、他に何か体を写せるものが欲しい。

スマホでもいいだろうけど、如何せん画質が悪いし、画面が小さい。家には誰もいないだろうけど、出来るのなら鍵を掛けられる部屋の中で着替えたい。

「ああ、緊張する……」

袋を持つ手に思わず力が入る。

これからこれを俺が着るのだ、女物の服をこの俺が……

「ダメだ、想像つかん」

やはりこういうのは実際に見てみたいと分からないものだ、俺は最寄り駅まであと一駅のところまで大量に雪崩込んでくる乗客に潰されながら、未来のことに思考を傾けていた。